

昭和二十四年七月二十五日▲第三種郵便物認可  
 昭五十四年十月十五日▲第三種郵便物認可  
 行(毎月一回・十五日発行)

(通第三六五号)

# 慈

# 光

第三十一卷

第十号

## 目次

信	念	自	御	羅	永	た	安
味	仏	照	一	針	劫	だ	樂
断	詩	日	代		の	念	集
	抄	誌	記		帰	仏	下
		抄	聞		依	し	卷
		(13)	書		所	て	よ
			抄				り
片	抄		(続・三)	盤			
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
花	木	西	井	高	福	池	
田	村	元	上	原	島	山	
正	無	宗	善	憲	政	榮	
夫	相	助	右		雄	吉	
.....	.....	.....	衛		.....	.....	
.....	.....	.....	門		.....	.....	
(19)	(15)	(13)	.....		(2)	(1)	
			(10)		(6)		
					(8)		

曇鸞法師は御在世中いつも浄土を願生しておられました。そこへ世俗の君子がおたずねして、十方の世界はみな浄土ではありませんか。法師はどうして西方浄土ばかりを願生されるのでしょうか、それはかたよった考えではありませんか、と。

法師が答えられるには、自分は煩惱具足の凡夫であつて浅薄な智慧しかなく、まだ菩薩方のように平等の智慧はありませんから、十方浄土を等しく念ずる力はありません。こうした自分は、愚かな牛と同じで、そのまま放任すると、帰る途も忘れ、どんな怪我をするかわかりません、そこでまぐさを前に見せて、それで牛を導くように、槽檻（かいばおけ）に心をつながして、散り乱れないようにしていただくほかに身を全うするすべはありません、と。

（註）道綽禪師はこの一文に聖道の教えを捨てて、浄土の教えに帰せられました。

## ただ念仏して

「ただ念仏して」という言葉は、聖人のよき人のおおせにきいたきわみであり、信の告白としてのかなめであり、また人に信をすすめるおくの、でもある。

この言葉を信への手引として受入れた人は、かず限りもないであろう。私などもその一人である。この言葉に引込まれて、じゃ私もと急にまねる気になって、断然声に出したのが、あこがれの信界への踏み切りであつた。

今日、我国では、津々浦々にいたるまで、念仏の声のひびきわたつていない処はない。日本人であつて、この声を或は口に、或は耳にした覚えのないものは、幼な児を除いては一人もあるまい。さすが大乘相應の日域、こうあるのに不思議はないが、他面、宇宙一切の事物は、その涯しなき流転の相のうちに、鐘の音さえ諸行無常とひびかせて、遠く近く、裏に表に、人生の最大緊急の問題、ただまこと

或人が次のようにたずねました。浄土に生れて、他の人々をたすけとげようと願うのであれば、苦を抜き樂を与えねばならぬ苦惱の人々は、今現在ここにおります。それなのにどうして他を利益したいと願いながら、浄土に生れようと願うのでしょうか。それでは苦惱の衆生を捨てて自分ひとりだけがさとの樂しみを求めることになりませんか、と。

そこで次のように答えられました。『智度論』にこんな譬を説かれている。父母眷属が深淵におぼれて居るのを見て、兄は直ちに飛びこんで懸命に助けようとしたが、力が足らず、共に溺れた。弟は遠くに走つて船を見つけ、それに乗つて、近づいてみんなを救い出した。われわれもはるかな浄土に往生して、仏となつて、大悲の船をとり、無碍な力を得て、はてしない生死の苦海に船を浮かべて、あらゆる衆生を残らずのせてさとの岸にわたすことが出来る、と。

## 池山榮吉

なる念仏への関心をそそらないものはない。

そもそも念仏は、救いのために顕われた力の、その目指すものへの呼び掛けである。それをそれとも知らないで、うっかり聞きながす人の、あまりにも多きに過ぎるのは、まことに歎かわしい限りであるが、考えて見れば、億劫にもまう、あいがたい弘誓の強縁とあるからは、また怪しむべきではなく、むしろただ聞いたというだけでも、その人とかの力とをつなぐえにしの糸は、早くも用意されたものとみなされるのを多とすべきではなからうか。

進んで念仏の意味を聞いたり、考えたり、とにかく口にしたりする段になつては、もう糸の端と端とがある交叉状態になつて動きつつあるのである。が、それがしっかり結びあげられるまでには、おそかれ速かれ、若干の時を要するのが常で、その間には、深淺、強弱、方向の正否などの

視点から、いろいろの段階がみとめられ、様々の転化が行われる。

が、その中で、念仏のいわれを聞くことは聞いても、それについて多少の考慮を払っているというだけで、まだ実際念仏するという程にいたっていない一類と、念仏にある価値をみとめて、とにかく念仏しつつある一類とは、最後の目標のへだたりから見ても、兎と亀の馳けくらべ、必ずしもどちらが先に行きつくとも限らないが、前者の前途なを遠慮なのにくらべると、後者の地点からは、もう山が見えている。念仏の出る出ないを堺として、前者は単に素見の客であるのに反して、後者はすでにいわば力との直接交渉の圏内に立ちいったものと見られる。

力との直接交渉は念仏を通して行われる。その進捗の程度にも、見方によっては矢張り幾多の段階があり、転化もあろうが、特にきわだったそれの三つがある。念仏を目的達成の一助と見るのがその一で、目的達成への努力の焦点とするのがその二。

念仏も棄てたものではないとか、念仏も結構役に立つとか、念仏は他の何物にも劣らないとか、さては念仏にかぎるとか、それぞれの思惑に動機づけられて、おのがじじ、応分の力を持出して念仏に精進すると、その効験は争えな

ならないものである。と同時に、他の何物をもっても代えることの出来ないもの、従って単独行動は念仏本来の性分で、念仏と外のものとの共働をはかるのは、その絶対性への反逆であり、冒瀆である。念仏はただ惜しみなく奪うものの上のみ、あまねくその余分を光被する。その一、その二の念仏が、とかく坐りが悪かったのに、その三に至ってにわかにはびたりおさまりがつくというのも、つまりこの故である。

念仏を聞きはじめてから、惜しみなく奪い終るまで、意識に上るにせよのぼらぬにせよ、それからそれと常不断的過程をたどってやまない幾多の生成推移は、個々の事象から見れば、或は桐一葉、或はいとし子の死、さては空中の聲、縁の下の聴聞など、千差万別、それぞれの機縁に由来するが、その原動の源にさかのばれば、一に力のもよおしにかかるとうなづかされる理由がある。

念仏は自動する。念仏は自省を促がし、自省は念仏の意義を深める。一方念仏の意義がいよいよ深く信知せられるにしたがって、他方ますます深く自己の何たるかが認識される。信知の深まりと自省の深まり、両者は相関的に働きかけて、交互に促進を競い合う。が、その実一つの楯の両面というべきもので、結局帰命の一念に抱擁する傾向に動

いもの、多かれ少かれ或る法悦が感じられる。ところが、困ったことには、いつも柳の下に泥鰌どろこがいるとは限らない。どうかするとさっぱり駄目なことがある。法悦の点滅、これがその一、その二の共通の徴候で、こうした徴候が続く間は、まだ本当の念仏が手に入ったものではない。

この関を越すには、今一度の転化に待たなければならぬ。日頃念仏を心にかけてあつかってはいるものの、どうもしつくり身につかない。どことなく拍子が抜けて、手持ち無沙汰の感をまぬがれないのは、つまり念仏を作善の具に供しようとするからである。わが手でまかなう資料としてあつかうからである。

念仏の一行にさえ及び難い身であると知れては、地獄一定はまぬがれない数と、焦燥の五里霧中にさすろうて、空しく指南の法輪を切望する折から、幸に宿善開發の時節到来、今までに覚えなひびきを念仏に聴取して、念仏は、救わんとする力から、力なきものへの呼びかけで、念仏する人から見れば、ただそれにつけ答えをするまでのもの、つまり力そのものの発動のほか何でもないと心証する。これが転化のその三である。

念仏は余計なものとして作られたものでない。なくては

くのである。落着くところへ落着かせる。からくりの妙、ただただ不思議と呆れるのほかはない。

念仏は招く、「一心正念にして直に來れ」と。念仏の心意気が、よくこの言葉に現われている。今これを放浪の旅を続ける一人子の帰りを、ふるさとに待ちわびる母の心に引き合やすことを許されるならば、直來をスグキテオクレヨと訓じ、一心正念にオネガイダカラと仮名を振っても、その見当はずれてしまいと思う。オネガイダカラスグキテオクレヨ、この哀々惻々の衷情が、相手の心にしみとおって、感銘した極促が、やがてそのまま内からにじみでる切々の帰心ともなり、「念仏まうさんと思いたつ心」ともなるのであって、この心境の変化こそは、力とその目的物との間に、二度と解ける氣づかないの固い結びを仕上げるのである。

この新なる心境のたたえる雰囲気は、「たのもしさ」をその基調とする。「たのもしさ」は、称えるものの心に残る余韻であって、一度キヤツチし得たら占めたもの、随時随所に再現して立ち消えるおそれのないのがその特徴である。もとより人生の行路、愛欲名利の騒音の絶え間はないが、騒音の高まれば高まる程、さえかえる念仏の中に、

花けと  
いよいよつものる「たのもしき」は念仏する者に絶えず繰り返される体験である。この立場から「神を知ったと思つていた私は、神を知ったと思つていた事を知った。私の動乱はそこから芽生えはじめた」とある有島武郎の述懐を聞けば、撰取の心光の保証を欠く信知のはかなさが思われて、うたた同情にたえないものがある。

あるルッター研究者の説によると、彼もまたその信の確立に随分苦労したものである。神を信じようとして信じ得ぬ悩み、これはルッターにとつて、極重の罪悪としての自覚であつた。神の有無を疑つたのではない。神に近づき親しむ気になれなかつたのである。それはそのはず、彼の心境に映じた神は、我々の観音菩薩を見るような、春風駘蕩の和やかさは気振りにも見えず、秋霜烈日、エンマ大王のようなすさまじい相好の持主で、外に瞋嫌の焰を現じているばかりか、内にも情けも容赦もない荒々しいものとしか思えない。こうした神を信ぜよとは、光秀にむかつて飽くまで信長を信頼せよと強いるにひとしく、無理な、出来な相談をもちかけるというものである。この無理な註文に応じ、相談に乗るべく、隠忍自重、ややともするともたげようとする抵抗の頭を自ら押えて、渾身の勇を鼓しつつ、我等の父たる神の肯定をめぐけて精進したのが、彼の求道

の過程で、悪戦苦闘のはて、根も精もつきて到頭我を折つて参つてしまったところが、即ち、信の成立となつたのであつた。それも一度で決着がついたというのではない、その後もときどき抵抗の嵐、否定の浪が盛り返してくるたびごとに、同様の苦闘をくりかえされなければならなかつたということである。

こんな話を聞くにつけても、しのばれるのは、念仏というもののあることのありがたさである。もし念仏がなかつたなら、私共も恐らくルッターに似たような動揺の悩みを反復しなければならぬであらう。

それなしには生きられぬ。「たのもしき」をともなう念仏、「まうさんとおもいたつこころ」をきっかけに、念仏とはぐれる気づかない「たのもしき」。わが意気ごみの強さでつかまえて離さないのではない。たのまれる力の方から絶えず供給してやまない念仏。

聖人は私をこの念仏にひきあわせて下さつた。筆に口にあらゆる方面から念仏の奥義をひらいて下さつて、鈍感な私にも、多少の「たのもしき」を味得させて下さつた。ほんとに私にとつて聖人は、空前にして絶後なる「無碍の一道」への最大の案内者である。

「仏と人」の中の「一里塚」

## 永劫の帰依所

偉大なるものを憧憬する時代は、真実のものを忘れ易い時代である。真実なるものは偉大なりという姿を持たない。真実なるものは隠れたるものである。隠れて、偉大なりという意識をさえ持たないものである。

世間に名を知らるる生活は、人間として下の下なる生活である。併し名を知られざるを誇る生活も、亦囚われたるものである。随順の生活者は、名の知らるると知られざるを問題としない。至るところに、随順の心を失わない。而して随順するが故に心は常に静かである。

忤う者は忤うことそのことにさえ、服従という名義をつけることがある。我は絶対の服従をなすが故に、我と違つるものを懲罰するという。併し懲罰は、何人が真実に之を行ひ得べきものであるか。懲罰すると称しながら、忤う心を満足せしめて居る者が、世には多いではなからうか。

親に従ふことは絶対の従順である。絶対の従順は、親の心が子において哺（はぐく）み出すものである。故に、子は忤いながら実は従つて居る。真実の親の前には、忤う子

## 福 島 政 雄

はない。忤う如くに見えて、実は従順なるものである。子は忤いながらも、親を絶対的に信頼して居る。そこにありたい親子の道がある。

久遠の親は、我等各自のいのちのうちに生きて通う久遠のまことである。我等はただ此の久遠のまことに生かされて居る。久遠のまことは人生の潤いである。すさみ行く心を温め、沈み行く心をひき立てる深きいのちの力である。

唯一筋に事業にいのちを投げ込む人、唯純一の情を此の人生にささぐる人、唯我意の動くがままに世をわたる人、人生のすがたはまことに様々である。併しそれらのすがたのすべてを包容して、悠々たる久遠のまことが無かつたならば、それらの様々の生活そのものも成り立たない。忤うものも、久遠の親の心にささえられつつ忤うのである。忤うことさえも、親のいのちの力の賜物である。

自覚とは何であるか。忤うものは、自覚とは自己の価値の意識であるとおもふ。或は、自己は無価値であると感ずる謙虚の自覚を云々する。併し、価値と無価値とに彷徨す

る者は、要するに囚われの人である。しかも我等は、常に囚われるものである。価値や無価値に囚われて、真個に自己を放下（ほうげ）する所以を知らない。従って真に落ちつくことがない。

随順の生活は、真に落ちつく生活である。親の心に落ちつく生活である。久遠の親のいのちに落ちつく生活である。我等は、そこに我等の生命を放下する。計らい多き心を、久遠の親の計らいの中に投げ入れてしまふ。そこに動ける心のままに、落ちつき行く心境が出現する。

久遠の親というのは空虚な概念ではない。久遠の親は、我等がいのちにおいて直に感ずる生きたるいのちである。我等の生みの親は、我等を久遠の親へと呼びさます此の世の縁である。生みの親を相對の存在として観じて居るとき、我等には、久遠の親が切実な哺みのいのちであることはわからぬ。生みの親と死別したる後において、はじめて生みの親が久遠の親のいのちの縁なることに目がさめる。そのとき、久遠の親のいのちが直に我等のいのちに生きてあることを、今更のように気づくのである。

歴史はとおき思出であるとも考えられるが、実は近き現実のいのちである。我等の過ぎし人生の行路は、二十年三十年の過去となれば、誠に人生一夢の感じを感ぜしめるものではあるが、併しながら、振りかえる過去の夢は、実は

現実に生きて我等を哺むまことの背景である。過去をおもて現在を淋しがる心は、不徹底の心である。現前の一日一日に、久遠のまことは我れを生かして行くのである。

人生四十といえは、直に惑と不惑とおもひ、人生五十といえは、我れも亦天命を知るかとおもふ。さりながら、惑と不惑とを一貫して、天命を知ると知らざるを論ぜず、久遠のまことは、常に我等がいのちにかよい、惑不惑、知命の空華に迷わさるる我等のいのちを、底の底から潤わさずんばやまじと、常住にはたらく。我等はそこに生きさせられて行く。

借問す、何人が此の世に久遠の誠に触れずして生き得る人があるか。忤うもの、ひがむ者、世のねちけ人、世のしれ人、白眼にして世をさげすむ人、これらの人も悉く、久遠のまことの胸に生かされて行く。死生を一貫して、我等を哺むいのちこそは、我等が永劫の帰依所である。

我等人生の経験を積み、年齢を重ねるにつれて、我等の宿業の世界が、同時に宿縁の世界であり、久遠のまことに貫きとおさるる世界であることに徹するところ、順逆明暗、ただ一筋の光の下にある。人生の獄囚は転じて久遠の親の一人子たるを知る。極愛一子地の自覚というも、そこを離れたものではないと思う。

(昭和十一・六・二七)

## 羅針盤

K君おめでとう。君が高等学校の難関を見事パスしたことを聞き、君の得意の様を思うと共に、僕も三十年前、かくありし若き日の思い出を、つくづく憶ふのである。高等学校三年間の生活は、学生生活を通じて一番青春にみちた花のようなものであり、人生生活のうちで、最も思い出の深い春の世界である。

若き日の思い出やよし白線の

帽をいただき我も歌いし

春の日を得意満面、寮歌を歌い歩いた思い出もよい。武蔵野の秋を友と理想を語り暮らした思い出もなつかしい。だが、花の三年の生活は一瞬にして、夢のように過ぎ去ってしまふ。春の日を歌うもよい。ただ人生の秋となって、夢ならざる実の残るよう、三年の春につちかつておくことを忘れてはならぬ。君に呈する祝辞に代えて、今夜この手紙を書く。僕の老婆心からである。

## 高原 憲

先夜のことである、美津野泉青は船へ往診した。二百トンばかりの発動船が海洋に横づけされていた。船長の息子が海へおちて発熱したというのである。狭い船長室で診察をすました泉青は、直ちに腰をあげようとせず、船長に話しかけた。

「船長さん、この船はどこまで行けますか？」

「この船は主に天津通いです。一ヶ月もあれば一航海出来ますよ」

「こんな小さな船でな！大丈夫ですか？」

「羅針盤がありませんか？」

「こんな船にも？」

「この羅針盤一つがたよりですよ。これ一つあればな」

「それでもシケに遭ったら？」

「そこです。シケにはなおさらこれが有難いです。たのみになるのはこれ一つ」

「そうかな。娑婆の海も、羅針盤なしには危いです」

「娑婆の海に？どんな羅針盤かな。この船には予備が二つありますよ」

「手製のはこわれるからな、娑婆航海に使うのは、絶対に狂いがこない」

「どうして？」

「仏様から下さりのものじゃ」

「……」

人生航海の優秀船たらんとして、皆、よりよき教育をうけんとしている。君が最高学府をねらっているのもそうであらう。小学よりは中学、中学よりは専門学校、さらになうことなら最高学府を出た方がいい。だが人の因縁によつて思うようにはならない。頭がよくても金が無し、金があつても頭が悪い。両方揃つても健康がゆるさぬこともある。ままならぬ娑婆である。最高学府から船出しても、もし羅針盤がなかったら、船は所詮、漂流でしかない。涯しない荒海に流転の旅をつづけるだけであらう。やがて難波は必定である。

船は小さくとも、羅針盤をいただいてさえあれば、行く手の方向をきめる。娑婆の海は千変万化、今日の快晴も明日の暴風雨と化するであらう。船はたえず方向をさえぎられ勝ちである。よし船足は遅々としても、羅針盤によりて進むべき方向さえ決まつたら、西へ西へと荒浪を乗り切つ

## 御一代記聞書抄（続・三）

前々住上人御病中に、兼蒼兼縁御前に伺候して、あるとき尋ね申され候。「冥加といふ事は何としたる事にて候ふ」と申せば、仰せられ候。「冥加に叶ふといふは弥陀をたのむ事なる」由、仰せられ候。（二〇六条）

元東大総長南原茂氏の幼児の思出を読んだことがあります。ある夕暮、お母さんに負ぶされて路上を歩いていた。

ふと振り向くと美しいお月さまが登っている。思わず「お母さん、お月さんがついて来る」と言った。すると母が、

「そうとも、お月さんは私どもを護っていて下さる」と言つて、言葉が続け「天にはのお、見る眼、聞く耳というものがあるて誰れ知らぬと思つて、ことでもちゃんと見ていて下さる知つていて下さる……」こういった母の言葉が忘れられず、脳裏に止まっていると述べられていました。誰しも幼児の思出というのは、駒切れになつて残つていくものです。それは幼い心に、何か強い印象を与えられ

て進めるだろう。西方へ羅針盤を向けた人生航海が宗教生活なのであらう。

人生は短い。しつかり腹をすえて勉強したまえ。優秀船たる努力を忘れてはならぬ。だが、船の出来方は結局相対価値でしかない。羅針盤がなかったら、どんな優秀船でもそのまま、あてもない漂流船となり、やがては難破の運命が待っているばかりだ。この羅針盤こそ絶対価値である。

毎年沢山の優秀船が賑々しく船出しているが、羅針盤が忘れられているようである。やがては漂流船になるかと思うと、おそろしいことである。狂いのない羅針盤をいたなく、これが人生航海にあつたの第一のものであり、最後のものである。

最高学府においてすら、この絶対価値の羅針盤が与えられないのはなぜであらうか。人間の手によつては作られぬからである。

人生の羅針盤とは、仏様から廻施せらるる名号である。南無阿弥陀仏のお六字である。

これを頂くには、聞法一路である。はかない夢を追つてゐる若い人達にはこの聞法の味が分り難い。然し聞法の外にこれは頂けない、素直に聞くがよい。聞くことによつて一切が恵まれる。魂は磨け、聞くより外に道はないぞ。

## 井上善右衛門

た光景や言葉が胸裏に止まるものでありましよう。今の思出を聞くと、南原氏の母堂がどんな方であつたかがありありと思ひ浮ぶようです。今の若い母親ならどう言つたでしょう。「お月様がついて来るのではない、そう見えるだけよ……」まあそんなところでしょうか。しかしそれだけなら印象には残らなかつたでしょう。科学的に正しくとも脳裏には残らない。人間にとつて何より深い真実があつたればこそ、忘れられない言葉となつたのではありませんか。

冥加という言葉は日本人には、小さい時から聞きなれてきた言葉です。しかしその真の意味に気づき、それが生活に融けている人は、現代では案外少ないのではありませんか。有限な人間の眼に見える事だけを相手にして生きる生き方、それで人間が本当の人間になつてゆくことが出来るでしょうか。この頃では完全犯罪とか云つて、誰れにも気づかれず、証拠を残さないように悪事を為すことを手柄のよ

うに考へる人があると聞きますし、事実人間の惻巧さが、何事においてもそうした方向にむかっているように感じられるのです。

冥加の冥とは、人間から見えないという意で、冥（くらし）という字が用いられています。加とは、加護で、恵みを蒙っているという意味です。人間は大きな宇宙天地の中に生をうけ、人間の気づかないような恵みに支えられている存在であるという情感が、この冥加という言葉に表わされていますが、それは決して古人の幻想ではありません。否、そこにこそ人間存在が自己の真相に目ざめてゆく道があるといふべきです。人間が自己の今ある真の位置に気づかずして、どうしてまことの人間となる道をたどることが出来ましようか。

現代人は身体的にはいろいろ自然の恵みや、他人のお蔭を蒙って生きていくという事は、説明すれば理解します。しかしこれは知的に思考出来るような分析判断であつて、真の冥加の自覚とは言い難いものです。英国のラッセルが「人間は大地の一部である。だから大地の営みと何等かの面で接触しているでなければ、人間は生きてゆくことが出来ない」といった言葉は、自然保護の立場からよく宣伝されますが、これはむしろ合理的思考から出る理解といふべきでしょう。それで事足りてありましようか。

毎事に無用なる事を仕り候義、冥加なき由、条々いつも仰せられ候ふ由に候。(二六五条)

前々住上人は御門徒の進上物をば御衣の下にて御拝み候。又仏の物と思召し候へば、御自身の召物までも御足に当り候へば御頂き候。御門徒の進上物、即ち聖人よりの御与えと思召し候ふ。(二九七条)

その他御一代記聞書書以外の古記録を涉獵して稲葉昌丸師は冥加について三十ヶ条に及ぶ蓮如上人の御言葉のあることを明らかにしておられます。如何に冥加の精神が上人の生活と実践に滲透していたかを知ることが出来ましよう

#### 四

冥加とは先にも言うように、ただ天地自然の恩恵を思う心に止るものではなく、さらに深く如来の真実に私の生命が加護され撰取され、正定不退の身の上たらしめられている目ざめにいたつて、始めてその真実性を実現するものとなります。今、本条はこの意を明確に示されて、冥加の精神の根源が何処に存するかということを示明されている点において、冥加の諸条を根本的に結ばれる重要な意味をもつ一条と拝するのです。

本条の兼誉、兼縁というのは共に蓮如上人の末の御子様で、上人の御病氣看護のためおそばに侍坐していたときのことです。何かと話合われているうちに、上人が事あるた

真の冥加とは、身心共なるこの私の全体が、絶対的眞実の撰取の中にあることに目ざめ、それが生命感情となつたところに聞かれます。この実感は同時に、眞実者の照覧を常にこの身に感じざるをえないのです。第一三三条に「同行同侶の目を恥じて冥慮を恐れず。ただ冥見を恐ろしく存すべきなり」とあるのは、大きな眞実界に眼を開いた人の極めて自然な心情であり、人間の狭隘な視野にとどまるものへの懇篤な誠めであります。

#### 三

万難の困苦を経て、一宗を再興された蓮如上人には、特にこの冥加の心情が生活の隅々に滲みわたつておられた様子を察することが出来るのです。

朝夕は如来聖人の御用(仏祖の賜もの)にて候ふ間、冥加の方を深く存すべし。(七八条)

御膳まいり候ふ時には、御合掌ありて、如来聖人の御用にて衣食ふよと仰せられ候。(二六九条)

蓮如上人御廊下を御通り候ふて、紙切の落ちて候ひつるを御覧せられ「仏法領の物をあだにするかや」と仰せられ、両の御手にて御頂き候ふ。(三〇八条)

万事過分なることを御嫌い候。衣裳等に至るまで良きものを著んと思ふはあさましき事なり。冥加を存じたが仏法を心に懸けよ。(二五九条)

びに口にされる冥加ということにお話が及び、父上の常にもうされる冥加とは、帰するところどういふこととございませうかと尋ねたのに対し、上人の仰に「冥加に叶うといふは弥陀をたのむ事」であるぞ、と申された、その末徹つたお言葉が二人のお子様の胸に深く刻まれたのでありましよう。それがいまの記録となつたのであります。

弥陀たのむというのは、本願の大悲が朝に夕にこの私に喚びかけ働きかけていて下さる、その弘誓に目ざめて撰取光中の己れとなることです。大いなる眞実者のまことに乗托するとき、究極の冥加を頂戴することとなります。それを「冥加に叶う」と申されました。冥見と冥慮を思う心はここにおいて開かれます。そして生活の一切に賜わっている恵みを思はせていただく事が自然と出来るのであります。大悲の御涙を胸深く感じて慚愧しながら、その御涙が同時に撰取不捨の無上の喜びに交々裏づけられてゆく、善導大師が「念々稱名常懺悔」とまうされたその信眼に裏づけられて冥加の眞実は生活と一味に融けて、まことの生を実現するものとなるのです。

冥加の心が単に慎ましい生活に尽きるのではなく、人間がまことの人間となる生命にまで高められなければなりません。弥陀の本願はその道を誓うていて下さる事を本条は確かと示しておられるのであります。

# 自照日誌抄 (13)

## — 信心と生活 —

### 西 元 宗 助

この八月、久振りに郷里鹿兒島に帰えり、西本願寺主催の教職員研修会で二日間、お話しさせていただく。終つてみると、さすがにくたくたでありました。

八月といえば、今から三十四年前の、わが国最初の悲惨な敗戦終結の月であります。顧みれば、この無謀な戦争のため何百万の大事な人々を、海外で、沖繩で、広島・長崎で失い、そのため、その親を、その妻子を悲泣させて今日にいたっています。そのことは、まことに哀痛極まわりなしであります。

ところでこの私は、この戦争に心から協力し、有縁の教子たちを戦争に送り出した一人であり、しかも生き残つたものでありまして、今まで言葉にこそあまり出していませんが、その責任——罪過をすくなくからず感じてまいっているものでございます。だから戦後シベリアに俘虜として送ったときも、またシベリアより帰還してからも、わた

垂れるばかりであります。

しかもこの度は、それにもかかわりませず、師範学校時代の有志の諸君が、わたしの古稀の祝いをかねて歓迎懇親会を計画してくださったのに、突然の所用のため急に予定を変更して帰洛することになってしまい、いっそう申訳のないことでありました。

それはともかく、南国の夏の空は海は山は、燃えるような光。それに桜島は、依然として、もくもくと地底から噴煙を吐きつけていて、「宗助ヨ、覚悟はよいか、これからが本番」と、叫んでいるようでありました。

近頃、信心と生活ということ、この鈍くなった頭で、時折、考えさせられています。

まず信心というものは、いつのまにか観念化し空洞化していくもの、殊にわたしの信心は、そのような性向をもっている。ところがその信心を、たえず本来の大信心にめざめさせるものこそが、実はわれらの現実の日常生活である。じじつ、どうにもならない現前の生活が、所詮は「さればそくばくの業をもちける身にありけるを」と、われらは大信海に帰入せしめる。

その反面、われらの生活も亦、たえず弛緩し懈慢しよう

しは何か罪障への償いというか報謝というか、なんともいえない気持ちで夢中で暮してまいりました。このたび西別院での講話においては、そのことをあらためて感じたことであります。

なお京都ではあまりお目にかかれなかった村上速水教授（龍谷大学・真宗学）が、病身をおしてのわざわざ御郷里榎脇から鹿兒島市まで出てきてくださいましたことは恐縮なことでありました。

わたしは教育者としては申訳のないことばかり。尤もそう申しても、読者の皆さまは、そのままに受取っては下さらないでしょう。それは致方ないことですが、ほんとうに申訳のないことばかり。殊に大学を出てからの師範学校での五カ年、満州の大学での五カ年のことは、頭のあげようがございません。その頃のお一人お一人に対し頭を低く

とするもの。ところがその生活に、それではあまりにも勿体ないと、慚愧と報謝の念を与え給うもの、これが即ち信心念仏である。即ち信心が生活を導き、生活が信心を明らかにする。この念仏生活の旨趣を、昨今あれこれと思索し、讚嘆することあります。

「縁なき衆生は度し難し」というお言葉、若いころは、なんと冷たいお言葉かと思っておりましたが、どうもそうではない。その反対に、このお言葉こそ、仏陀如来のやるせない大悲の発露であることが、近頃しきりに思われる。じじつ、そうで、如来は無縁の大慈悲となり、不請の友となり給い、本願の名号となつて、わが身にいたり届いてくださる。まことに出離の縁なき衆生とは、この私のことであります。

なお去る八月号の日誌抄（12）に、「なむあみだぶつ、親のよぶ声、子のしたう聲」を、木村無相さんの詩と書きましたのは、わたしの誤聞でありまして、実はさる古人の作とのこと。無相さんから訂正するよう御依頼がありましたので、附記させていただきます。

八月二十四日 稿了



念 仏 詩 抄

今のイノチ

香師||香樹院徳龍師

香師おおせに  
不思議々々と言うが  
今までイノチ  
ながらえたのが  
不思議じゃ

死が遠いから

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

木 村 無 相

聖人ご和讃に

南無阿弥陀仏を称うれば  
この世の利益きわもなし  
流転輪廻の罪消えて  
定業・中天のぞこりぬ  
ああ

今のイノチ——  
たまわりしイノチ——

香師おおせに

わが心をたづねてみれば  
死なねばならぬと言うは  
みなウソじゃ  
煩惱がウソにしておる——

死が遠いから  
後生が遠い

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

その善知識の御化導は

香師おおせに

善知識の  
御化導(ごけどう)は  
暗夜の  
明燈(めいとう)——

その善知識の御化導は  
ただ念仏して弥陀に  
助けられまいらすべし  
念仏 念仏  
ただ念仏——

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

香師おおせに

ただ今が臨終と思わば  
ただちに聞き得られ  
おおせがありがとうなる

ただ今臨終

念々臨終  
あれこれ言ってる  
ヒマはない  
おおせ一つの  
ほかはない

ナムアミダブツ

わたしのこと

香師おおせに

“まことに如来に對すれば  
不実ばかりの身なれども  
不実なれば不実なほど  
真実の大悲でながめたまい  
不実の心中を真実でお受け  
ください

どうぞどうぞの御念力が

今あらわれて

いやでも聞かねばならぬ

坊守の身になしくだされた——”

坊守ならぬ

わたしのこと

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

骨をおるとは

香師おおせに

“耳に聞こえて

心に聞こえぬ——

耳にわかりて

心にわからぬ——

そこからが

骨のおりどころなり”

またのおおせに

“骨をおるとは

聞いた上にも

よく聞くこと”

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

若さは

香師おおせに

“四十になれば五十まで

七十になれば八十まで

老いても死ぬ気がサラにない

煩惱こそ深うなれ

かえつて邪見になるゆえに

仏法は若きうちにしたしなめと

おおせらるる”

わたしは今年七十五

老いてますますます邪見なり

若さは法のタカラなり

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

妻や子は

香師おおせに

“妻や子を

アテ・チカラにしている

ようでは

死出の山は越されぬ”

ああ

妻や子は

地獄の使い——

お念仏は

極楽の使い——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

# 信 味 断 片

久遠の弥陀仏と法蔵菩薩

花 田 正 夫

本来仏であられた阿弥陀仏が、どうして法蔵菩薩となつて、四十八願を建てられて十劫の昔に再び成仏せられたのでありましょうか、ということをご愚考していました時、白杵祖山老師の「如来の衆生化して下さることによつて、我等衆生が如来化される」というお言葉が浮かびました。

小鳥が卵をあたたため、雛を上手にそだてて行く姿を観察しておりますと、先づ卵を胎内に持つと、巣づくりがはじまり、卵が生まれますと、雌雄かわるがわる抱いてあため続けます。雛となると、餌をやわらかくしてあたえ、やがて歌うこと、飛ぶことを教えて巣立ちさせます。そこに親と子が一体化しておるのに驚かされます。

如来が煩惱にしばらくはてしなく迷ひ苦しむ私共をみそなわれて、「三界の衆生みなわが子なり」とも「衆生を愍念すること一子のごとし」とも「慈悲随逐して憤子(こ

に、ことごとく真金色にさせたいとは、私共が老少善惡とへだて心から争ひ苦しむ故であります。第八願に、他の心を見る智慧も与えたいとは、自我の殻に閉じこもつて、飽くことのない利己心に障えられて、他人の心を知ることができぬのを悲しまれるからであります。さらに第十二願に光明無量ならんとは、到るところでやりそこないをする私共だから仏様としては、どこでも眼がはなせぬからであります。次に第十三願に寿命無量ならんとは、私共がいつまでたつてもさとりがひらけず、独り立ち出来ぬのみをなわして、何時までも護つて下さうためであります。現に精薄兒を持つ親は、その子のために死んでも死にきれないのであります。

以上、ひろい読みいたしましても、菩薩の願ひは、煩惱具足の私共に、どうしてもなくてはならぬことにかかりはてて下さるのが分るのであります。このように本願を仰いでわが身のあさましさを知らされ、あさましさを知らされるにつけて、いよいよたすけんと思召し立つて下さった本願の深広な恩徳を謝すばかりであります。これひとえに、如来が衆生化して下さったお蔭であります。

金子大樂師は、親になつて、いよいよ親たらんとする願ひがおこると云つておられます。教師もその資格を得て教え子に接する時、真の教師とならずばやまぬ願ひに燃える

うし)の如し」とも「衆生の苦惱はわが苦惱なり、衆生の安樂はわが安樂なり」とも、釈尊は仰言つていられます。そこに如来はさとり岸にじつとしていられるのでなく、衆生の心想中にはいりこんで下さつて、私共と一体化して、同悲、同喜して下さるのであります。

然し親心子知らずでありますけれど、知らぬ子を無理からぬことと理解する親は、昼夜に子にかりはてて慈愛をそそいでやむときはありません。点滴が岩をうがつよ様に、この親の念力が子にしみとおるとき、子は親のふところに引きいられるのであります。『法華経』にある、長者窮兒の譬喩は、このころをそのまま説いてあります。

弥陀仏が法蔵菩薩とあらわれて下さるのも、衆生化される如来の大慈悲の顕現であります。ころみに法蔵菩薩の四十八願を仰ぎますとき、第一願に地獄・餓鬼・畜生なき国をつくらんとは、私共がいつも貪・瞋・痴の煩惱に終始して三悪道の種をまきずめて居るためであります。第三願

のであります。仏の成仏もこのように、成仏されて、いよいよ仏たらんとする本願から、法蔵菩薩とあらわれて、今一人の私となりきつて育てて下さるのであります。

## 釈迦仏と弥陀仏

いつも申しますように、遠ざかれれば忘れ、離れば疎んじるのが、この世の鉄則であります。併しこれに逆行するものに親と仏があります。子は親の膝下に居る時よりも、遠く離れていよいよ思慕し、生前よりも死後に、それも歲月が経つにつれて、子供の心の内にあざやかに生き続けるのであります。私が二十九才の時、大連の西本願別院に赴任しては故郷の母を偲び、父を亡くして五十四年を経ましてまざまざと父が想われるにつけ、このことになづかさされるのであります。

次に釈迦仏につきまして、大類純氏の仏伝の終りに「長阿含経には、先ず最初に仏の入涅槃のことを述べ、ついで誕生・出家・成道・転法輪となつてゐる」とありましたが、『大無量寿経』には「滅度を示現して拯濟(じょうさい)すること極りなし」とあります。私共の一般常識では、いのちあつてのもの種だ、死んで花実が咲くものか、というように、死は一切の働きを滅亡させると考えるのに、ひとり

仏陀は、御入滅されて、人々をかぎりなく救済してやみたまうことがないといひます。現に釈尊がおかくれになつて二千五百余年が過ぎ去りましたけれど、一切人類の久遠のみ親と申すべき仏陀は、いよいよ鮮かに、人々の心の中にあらわれて、不滅のともしびとなつて下さつて居るのであります。

また私共日本人にとりまして身近かな事実として、親鸞聖人を想います時、そのことが実証されているのであります。聖人は御在世中はあまり広く世に知られた方ではありませんが、六十歳を過ぎられて三十年間の京都のお生活も、お家もお持ちにならず、転々と移り住まれましたことなど、真宗内部では色々と伝えられていまして、外の歴史では当時影の薄い方でありまして、明治の頃、親鸞抹殺論まで出たほどでありました。然し時流れて八百年の今日にいたつては、聖人の名を知らぬ人は日本にはないまでもなれば、年々歳々聖人をお慕いする者がふえております。これにくらべ、聖人と同時代の源頼朝公を思う時、雲泥の差に驚かされるのであります。一つは征夷大將軍となり鎌倉に幕府を開いて飛ぶ鳥をもおとす威勢がありましたのに比し、一介の乞食僧に等しい聖人の存在でありました。併し今日に及んで頼朝公の鎌倉の墓前にはたして幾人御礼参りして居るでありましょうか、夏草や武者共が夢の跡の感

耶城に、ゴウタマシツタルと名告られて、人間の姿であらわれて下さり、やがて三十五歳に菩提樹下で成道され、本仏弥陀の本懐を人間の言葉で説いて下さつたのであります。顕微鏡がなければバチルスは見出せません、また望遠鏡がなければ、天体の観測はできません。そのように釈尊は私共に、或は顕微鏡となり、或は望遠鏡となつて弥陀仏のおはたらきをつたえて下さるのであります。和讃に

娑婆永劫の苦をすてて 浄土無為を期すること  
本師釈迦のちからなり 長時に慈恩を報ずべし  
と、その徳沢を謝しまつるばかりであります。また

釈迦弥陀の慈悲よりぞ 願作仏心はえしめたる  
信心の智慧にいりてこそ 仏恩報ずる身とはなれ  
と、御恩をよろこぶころまでが、釈迦弥陀二尊の善坊のお蔭によるぞとお知らせ下さるのであります。

以上、釈迦仏をして釈迦仏たらしめられる弥陀仏、また弥陀仏を釈迦仏として仰がせて下さる釈迦仏二にして一、一にして二の妙消息を拝するのであります。

### 自帰依・法帰依

八十御入滅の前にされた釈尊は、阿難尊者に

でありましよう。それに反して京都の聖人の御廟に、幾十万人の人々が心から報謝のお参りをしておりますことでしょうか。時代の波にさえられず、徳沢がいよいよ地をうるおして、広く遠く及んでおります、そこに永遠に輝くいのちの尊さを仰がずには居られません。

さて釈尊といひ、親鸞聖人といひ、八十年、九十年の地上のいのちを超えて、時と共に無量、無辺にかがやくいのちにふれる時、そこに無量寿、無辺光の阿弥陀仏の光徳が仰がれるのであります、それは私共のころからつくり出した觀念の仏ではありません、いきてかがやくまことのいのちであり、現に只今私を生かして下さるあたたかい御親の大悲心であります。

この絶対の阿弥陀仏は、相対分別の智慧しか持ちあわせません私共には、見る方も、近づく足もありません。それなのに不思議に信ぜずには居られませんのは、ひとえに阿弥陀仏の善巧方便のおはたらきによるのであります。ここに和讃にありますように、

久遠実成阿弥陀仏 五濁の凡愚をあわれみ  
釈迦牟尼仏と示してぞ 迦耶城には応現する  
と、人間の私共をたすけようとて、久遠の阿弥陀仏が迦

「阿難よ、なんじらはただ自らを灯明とし、自らを依処として、他人を依処とせず、法を灯明とし、法を依処として、他を依処とすることなかれ」と遣訓せられました。

時に、サラ双樹は時ならぬ花を開き、虚空から香華が降りそそぎ、微妙な音楽が天の方から聞えて、仏を供養申したのであります。これに對し、

「阿難よ、かかる手段をもつて、仏を尊崇し、供養すべきものではない。ただ法を知り、法に随つて生きることがまことの供養である」と教えられたのであります。

「自らを灯明とし、他人を依処とせざれ」「法を灯明として他を依処とすることなかれ」とある御遣訓をうけて、蓮如上人の御一代聞書の第一五四条と第二〇一条に

「同行の前にては悦ぶものなり、これ名聞なり。信の上は一人居てよろこぶ法なり」

「仏法は一人居てよろこぶ法なり。一人居てさへ尊きにまして二人寄りあわば如何ほど有難かるべき」

を思いおこされるのであります。さらに第一七一条に「往生は、一人一人のしのぎなり、一人一人仏法を信じ後生たすかることなり云々」

も思いあわされますことです。

他山の石ながら、聖フランシスについて、或人が彼の祈りを聞きたいと願って、身辺に待して昼夜に見まもっていつてひとりの時、父よ！父よ！と聖像の前でくりかえしていた。これが彼の祈りであったと福島先生からお聞きしたことがあります。

とかく私共の眼が外にむいておりますように、心も他人にいつも向いて、自分自身をとりおとし易いのであります。大勢集って氣勢をあげてよろこぶ、所謂名聞心の満足に終つてはなりません。

ここに御入滅前の最後の御遺訓を拝しながら、親鸞聖人の常の仰せこそは、このことを御身につけていられたのだな！と想到させられます。

「聖人の常の仰せには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを助すけんと思召したちける本願のかたじけなさよ」と御述懐候いし云々と。仏法はあくまでも自分一人の救済に徹し、その一人の中に、一切人の姿もおさまるのであります。「さればそくばくの業を持ちける身にてありける」とは、聖人が一

切人の業報の中に自己を見出され、同時に自己の中に一切人をおさめられた御述懐であります。なればこそ、この常の仰せをおきかせうけるにつけ、自然に、私一人がためなりけり、と転入させられるのであります。

#### 白色白光・青色青光

親はどの子もかけがえがなく可愛いのであります。そこに親心は子供に対し平等であります。真の平等でありますから男子は男子らしく、女子は女子らしく相応して育てるのであります。仏陀は平等に徹して、梅は梅、桜は桜としてそれぞれの花を開き実を結ばせて下さるのであります。私はこの趣きを、秋の七草になぞらえております。萩、なでしこ、おみなえし、ききょう、尾花、葛、藤袴が秋の野辺を夫々にかざっておりますように、人それぞれの持ち味が生かされていくところに、仏心の平等にしてさらにおへだてのないめぐみを渴仰させていただくのであります。

これに反して、相対分別心しかない私共は、平等と云えば秩序を無視した悪平等におち、その反対に差別に立つ時は平等を無視して悪差別に墮してしまいます。若し親が子に対し、平等だからと云ってそれぞれに順応して育てない

ならば、行き詰ってしまいます。又子に同じ得ないで、子は親に従え式になりますと、悪差別におち、ところが通わなくなりません。この両極端のみ走る私共も、不思議な仏心のまことの光をうけて、各々そのところを得しめられるのであります。おろかな周利般得も、肥汲み人夫の尼提も、愛欲に狂うた蓮華色比丘も、父を害した阿闍世王も、おなじさとりひかりのもとに、夫々の特長を發揮しております。

常不軽菩薩は、一切の有縁の人々を拜んで「あなたも仏になれる人だ」と告げ続けたとあります。これは、成道の釈尊が、清浄な法眼をもって世間を觀察されて

「奇なるかな、奇なるかな。一切衆生は一大蓮華池の如し。それらは暗いよどみの中に根を置きながら、水中に生じ、水中に長じ、やがて水面を高く抜きん出て、汚れない紅き、または白き花を咲かせるであらう」とたたえられて、八十年の御生涯はこの仏性の開覚に専念して下さった、この釈尊の御心にかやうものがあります。

さて、一切の衆生が仏性を具しているとの釈尊のお示しによって、人間尊重の原点が見出されるのであります。人の生命が大切だ、人権は尊重せねばならぬとよく聞きますが、何故に、となると答えがまちまちで、根拠がはっきりしないではありませんか。

併しながら、一切衆生ごとごとく仏性を有すとは、清浄な覚者であられる仏陀の恵見においてのみ見出されるので、菩薩のさとりを得てわずかに見出せるようになると教えられます。もとより煩惱におおわれた私共凡夫の智慧にはそれを知らぬことは出来ません。仏性があるののいと云ってみても、妄念妄想の域を出られません。これは仏語を信じて知らされるので、信知あるのみであります。

昭和五四・九・六日

#### 御案内

時・十月二十八日午後一時（日曜）

所・京都市右京区山田開町 浄住寺

市バス、京都駅より苜寺終点下車。

新京阪、桂乗り換え、上桂下車。

京都 一道会

# あとがき

十月二十八日(日)に例年のように、京都洛西の浄住寺で、池山先生を慕う京都一道会を催されます。年々「一期一会」の感がしきりにいたします。どうか皆様方の御元氣なお顔を見せていただきたいものです。

池山先生の「ただ念仏して」は、御晩年にプリントにされて頒布して下さい、また最後の御講話には、「たのもさ」と附題されて是を普遍して下さいました。すでに慈光には記載いたしました、重ねて御目におかけいたします。

福島先生の「永劫の帰依所」は、草木も大地に根ざしておりますように、人としての真実のよるべ、しかも雨宿りのような仮りなものでない、久遠の依所を仏陀の御ふところにありと、ねんごろなおさとしてあります。

長崎の故高原憲医師の一文は、人生に処する根本の問題を教えられます。アラビヤ物語に、父にかわって隊商に加わった少年に、北斗星を教え、方向を間違わぬように願ったのを想起いたしました。

井上様は、蓮師の冥加の味わいについてねんごろに誌して下さいました。白杵老師

が「大いなる恵みのなかにめぐまれて、恵みもしらでみめぐみに生く」と、最後の病床にあって書きのこして下さいたこともふっと心に浮かびました。

西元様は忙しい御日程の中に、故郷への旅をせられ、そこに見えるもの、聞くものの上に、黄色黄光、白色白光のおもむきを告げて下さいました。ことに「生活と信心」は、相依相乗して浄土の旅をたどらせて頂ける趣き、反省させられますことであります。又、縁なき衆生度しがたしの仏の三不能の一つをあげられて、そのまま言って下さる御慈悲を讃仰して下さいました。

木村さんは、退院後、ともかくも小康を保たれて、太子園に静居。文字通り、只今、只今に生きておられます。昨日はすぎ行き、明日は来たらず、今日ばかり大事なものはないことを、身をもって味っておられます。すこし身体の調子がよいと、あぐらをかき易い身、用心、用心です。

最近、名古屋一道会で、正信偈の讃仰を続けております。私共は、法蔵・積尊のひとつながりになって、私共に慈悲の手をさしのべて下さる点を誌し、又、釈尊の御遺訓と、仏光照護のもとに各々さるところに落ちついて、本分を發揮させていただきますことを誌しました、御一読下さいませよう。

# △ 御案内 ▽

○毎月第一、第三日曜、午後一時半、一道会例会。一道会館の南隣り、南区駈上町二の八六。鬼頭康彦氏宅。

市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。

地下鉄、新瑞橋終点下車。

○教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四  
毎月二十四日、午前・午後。

市バス、御器所通り。又は北山下車。  
地下鉄、御器所通り下車。

定価 半年 七〇〇円(送共)  
一年 一四〇〇円(送共)

名古屋南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

電話八二一七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷 坂部 光雄

名古屋南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番

郵便番号 四五七